

学習目標を 達成するための 具体策

学生を主体的な学びへ導くために、大学が、教員がすべきことは何か。学生の自主的学習を促す具体策について、参加者からの質問をもとに、2名の講演者と本学FD委員長が意見を交わす。



鈴木克明

熊本大学大学院教授

大森不二雄

本学大学教育センター教授

山下 英

本学大学教育センター長・FD委員会委員長

西山雄二(司会)

本学人文・社会系准教授

1. 学生からの疑問や質問に対して適切な説明ができない場合、われわれ教員はどうリアクションすればいいのでしょうか。

大森 適切な説明ができないというのは、その意味によると思います。要するに、自分が教員の立場であるにもかかわらず、分からない知識や情報を求められたという場合であれば、一つは、今の時点では自分は知らないで次にまたということがあろうと思うのですが、もう一つ、「君はそういうことにも関心があるのか。自分で調べてきなさい」という手もあるかと思います。質問者の意図と違うことかもしれませんが、取りあえず、そう解釈した場合のお答えとしてはそうなると思います。

鈴木 基本的に同じです。「いい質問だね」とまず言って、「どうしてそう思ったの?」と聞いて、「なるほど、ではちょっと調べてみたら」というのがいいのではないのでしょうか。教員というのは何でも知っている人間だと思ってもらっては困るので、「新しい情報は知りませんよ」ということは、私は言ってしまう。

2. 学生をやる気にさせる、授業をどう盛り上げるかという話ですが、やる気や向上心、目的や夢が全くないような学生にとっても、われわれがやっていることは有効でしょうか。

大森 自分の授業では、いわゆるLMS、学習管理システム、eラーニングシステムを使って、予習の場合は、文献やWebサイトに載っている資料、難しく言えば論文などをあらかじめ読ませています。あらかじめ読ませるという意味は、「読んできなさい」では駄目なの

で、読んできたことを前提に学生同士でグループディスカッションをさせ、さらに各グループからクラス全体に対して報告させるというように、読んできていないとそのクラスにいられないという形でやっています。

復習については、授業を踏まえて、その日のトピックについて考察させて、それを掲示板に投稿させるということをしています。いずれも、外発的動機づけの面では、単位、さらにはどの成績になるかということに影響するという形でやっています。

鈴木 首都大はそれほど学力が低い人は入れない大学ですよ。そうすれば、問題はレリバンスの問題であって、コンフィデンスの問題ではありません。やればできるけれども、やりたくない。なぜこれをやるのかが分からないから、やりがいを感じられないから、やらない。やってもできないわけではない。もしそうであれば、何のためにこれを勉強をするのかということを開蒙していく必要があるということだと思います。

逆に、やってもできないからやらないということであれば、これはコンフィデンスの問題です。ですから、ブレークダウンするなり、最初は易しい問題から始めて徐々に難しくするなりという作戦を取らなければいけないのですが、そうでないとすれば、成績優秀な人がやる気があるとは限りませんので、やる意味が分からないときはやらないです。やらなくても卒業できるのであれば、さらにやりません。これは個人のエフォートの問題ではなくて、教員の資質の問題でもなくて、要するに決め事の問題ですから、みんなでやらないとよくなるらないのです。

3. 近年の学生は、予備校の影響で分からせてくれない授業は悪い授業と考えて、分からせてくれることに安心感を求めることが多いと感じています。大学に行くとき自由放任だと思っているのではないのでしょうか。

鈴木 そのとおりです。高校とか予備校までは、依存性をなくすことがないような教育をしているのです。要するに、教育が常に必要になるように自らを方向づけるのです。しかし、大学というのは、自立させなくてはいけない、それをいかに取り払っていくかということを使命として持っている教育機関なので、親切にするのは駄目なのです。ですから、卒業までにだんだん抜いていかなければいけない。抜くことによって、立ち立できる人を育てるわけです。ですから、今までのぬるま湯とは違うので、今までの方がサービスがよかったと、みんな思うのです。

それは当然で、そこからのスタートなので、「君たち、このままいくと、ずっと大学にいななければいけなくなるよ。そうではないでしょう」と。自立するためには、大学の4年間を通して、自分でやるとはどういうことなのかということを徐々に教えていかなければなりません。ですから、こちらの方が戦いとしては厳しいのです。そう理解した方がいいのではないかと思います。

4. いっそのこと講義の部分は教え方がうまい人に任せて、研究を中心にやってほしい先生は最小限の教育をする。教育中心か研究中心か、制度的に分けてしまうという手もありではないのでしょうか。

西山（司会） フランスなどでは多いですね。やはり向き・不向きがありますし、アメリカでも大学院生が初等教育の中に入るとかということがありますが、この辺はどうでしょうか。

大森 今お話があったように、海外ではそういう例があります。私が聞いている限りでは、今挙がらなかった国でいくと、オーストラリアやイギリスでは、近年そういう傾向が強くなっています。それはなぜかというと、実は教育重視ではなくて研究重視なのです。研究評価によって大学の補助金収入や評判（世界ランキング等）が大きく左右されるので、研究できる教員は

できるだけ研究に専念させたいというのが、本当のところなのです。教育重視ではなく研究重視で、大学経営陣の戦略的選択によって、オーストラリアやイギリスで教員の分業が近年特に顕著になりつつあるという話は聞いています。

それが本当にいいかどうか、教育の立場からは、今言った大学の選択ということとは別問題として考えなければいけないのですが、おっしゃるとおり、向き・不向きというのは、やはりあるわけです。ただ、鈴木先生のお話にあったとおり、情報提供・知識提供のうまい・へたが教育・授業の中心なのかということがあると思いますので、私のプレゼンテーションでもおしまいの方でちょっとお示したように、うまいとかへたとか、テクニックとかコツとかという発想を超えて、きちんと授業をデザインしてやってみようということ、やられればいいのかではないのでしょうか。

鈴木 適材適所はもちろんあり得ると思います。これは大学の決め事ですから、5:5でやる人、7:3でやる人、3:7でやる人というのを認めて、そういうふうに契約すればいいだけの話です。その背景にある意図が、自分は教育をやりたくないから研究の時間をもっとくれということなら、それはそれで、ちゃんと研究成果を出して、このぐらいの金を持ってきてねということにする、要するに、逃げればいいのかというわけではないという話です。逆に、そういうことにはあまり興味がない、学生といるのが好きなのだという人は、もっとコマを持ってください、その代わり研究はあまりしなくていいよと言っていいかどうか、よく分かりませんが。

一方で、研究の成果を上げている先生が話す魅力もあって、そういう人が教育の最前線に立っていることが大学の魅力でもあるわけです。そういう意味では、できる人間はどこでも引っ張りだこということになってしまうのですが、そういう矛盾をどう解決していくかという話になるのではないかと思います。

アメリカでは、日本的な講義が一番上のプロフェッサーがやるのが常識です。基礎知識は若い研究者では絶対に教えられない。要するに、若い人間は非常にとがった部分の一つあって、そこしかできないわけですから、もっと入門的な講義は円熟したプロフェッサーが教える。そういうフィロソフィーもあり得るわけです。ですから、どういう決め事でやるかは、大学が考えるべきことだと思います。

山下 まず、自分はあまり教育したくない、今そこそこ研究しているので教育は勘弁してよということだとすれば、そんなに甘くないです。アメリカにしても、教育をあまりしていない研究者は、非常に長時間研究していますし、教育で夏休みも給料をもらっている人は、ずっと授業をしています。日本はどちらにしてもぬるま湯というか、われわれにとっては環境のいいところで、分ければ楽になるというものではないと思います。

もう1点は、今、教育がうまい・へたとか、向いている・向いていないと言っているのは、先ほどの予備校や高校の授業のように、聞けばすんなり入って非常に分かりやすい授業ができるかどうかという意味ではないかと思います。しかし、大学の教育はそうではなくて、最終的には独り立ちをして、自分で考えていたり、問題を見つけていたりする力までを求めているわけです。そういうことを伝えられるオーラを持っている人というのは、やはり研究の第一人者です。そういう人が話すからこそ、それが学生に届いて、その学生が育っていくのです。



5. 学習時間について。海外では課題を課すことで、むしろ受動的な学習とされるのではないのでしょうか。給付の奨学金がないので、アルバイトをしなければいけないとか、就活で落ち着いて勉強できないという状況もあるのではないのでしょうか。

大森 就活が早いとか、バイトに時間をかなり割かなければいけない学生もいるとか、おっしゃっていることはすべて否定できない現実の一面ですが、それは全部言い訳です。うそではない、本当なのですが、それだけで日本の学生の学習時間の少なさは説明できないということです。端的に言えば、せっかく入学時点ではそれなりにモチベーションを持っている学生が、1年たつと上級生と同じようになっていく。結局、最初のモチベーションを維持し、高めていくだけのことが、多くの大学で行われていない。要するに、授業外で学習しなくても済んでしまうということをちゃんと見ているわけです。自らもそれを先輩と同じく実践していくということでできてしまっているの、それをすべて就活などの外的要因に帰すことはできません。

バイトで大変な学生も確かにいますが、「これまでい

くらでも時間があつたのに何をしていたのだろう」という学生はいますから、それはあらゆる外的要因を持ってきても正当化できるものではないと思っています。

鈴木 解決しようと思って何らかの努力をするものを問題といいます。ですから、問題としてとらえるということは、それを何とかしようと思っているということであって、それ以外のことはリアリティ（現実）というのです。今の話は、現実の話に聞こえます。それはどうしようもないので、大学教員としてはリアリティなのだ。では、何を問題ととらえて、何を解決するかということですが、できる範囲は狭いので、そこで努力するというふうにならないと、言い訳に聞こえます。ですから、外的要因はいろいろあるけれども、それはリアリティなのだから、それを変えるわけではない。

それから、学習時間を量で計って、それで実質化したいというのは間違いです。そこだけは、違う方向に行かないようにした方がいいと思います。30時間学習したのが15時間に比べて実質化になっているのは大きな間違いで、そうではないのです。30時間勉強するのと15時間と同じ成果が上がるのであれば、15時間の方がよほどいいのです。それが効率化という意味です。

ですから、そうではなくて、シラバスでこれをやれば単位が取れるということが明確になっているのだから、それができたかどうか実質化ということなので、何時間やるという、努力点を認めるというのは駄目なのです。そこだけは間違えないでいただきたいです。今は5時間未満しかやっていない人間が30時間勉強するようになったというのはいいのですが、それと実質化したということは違います。これだけの成果が上がるということが実質化ですから、そこは間違えないでいただきたいと思います。

山下 今出ていた話は、FD委員会で、例えば授業外学習時間を増やすにはどうしたらいいでしょうかという話題でディスカッションをすると、必ず出てきます。まず、1時間半の授業に対して3時間というのは国際標準ですので、2単位につき3時間というのは変えられません。そのときに、3時間でいいのかという話になるわけです。そうすると、就職活動やアルバイトという話が出てきて、日本の学生には無理なのではないかという話も一応出ます。

確かに状況は違うとは思いますが、それにしてもアメリカの学生と日本の学生を比べたら、圧倒的にアメリカの学生の方が勉強しています。就職活動とアルバイトの時間を引いて、ほかの時間をどう過ごしているかを比べても、全く違います。ですから、そこだけで理由にはならないということは、一つ考えています。

それから、時間だけで計るなと鈴木先生がおっしゃいましたが、それも皆さんから意見が出ています。どれぐらい成果を出したかというところが重要であって、時間で計るのはやめましょうということです。ですから、3時間やりましょう、何時間やりましょうという与え方は間違っているとも言っています。ただし、目安は必要です。急に3時間といっても状況が違うし、今まで0時間、0.5時間だったものを3時間というのは無理なので、取りあえず本学では、おおむね標準の人が1時間ぐらいでできるような課題を課してはどうでしょうかと言っています。既にそういうものを課しているところもあります。

ですから、すべての授業で大体目安として2単位に対して1～2時間程度の負荷をかけるようにすれば、すべての人が勉強する量が増えて、大学に行ったことによって獲得できる能力も増える。そうすると社会の見方も変わって、大学の教育の意義をだんだん分かってもらえれば、就職活動の方法も変わるかもしれないし、社会の皆さんの見目が変わればそういう状況も改善させるかもしれないので、まずは小さいところから進めていかなければいけないということを、FD委員会の中で話し合っています。

6. 鈴木先生のeポートフォリオに関して、この考え方は、例えば研究室における卒業研究に似たような印象を受けました。学部時代の授業で基礎を学んだ上で、応用問題について研究に取り組むということに近いのでしょうか。

鈴木 卒研のイメージが一番近いと思います。卒業研究のタイミングが就職活動より後に来るので、就職戦線でアピール材料に使いたいのに使えないという問題はリアリティなのですが、私が言っている応用課題というのは、やる人間によってアウトプットが違うものという定義なので、卒論がイメージとしてあると思います。それを1年生からやったらいいのではないかと

いう案が私の主張です。

要するに、入門をやって基礎の知識を全部入れてからでないと応用課題ができないというのはおかしくて、そうではなくて、少し基礎知識を入れたら、その知識の範囲でできる応用課題を考えて1年生からやる。それを2年生もやる、3年生もやるということで、卒研を年がら年中やっているような大学というのが、私のイメージになります。

7. 講義は最終的にはなくてもいいのではないかというお話がありましたが、ペース作りや、学生が大学に来て知識に触れる機会を作るという意味では、意義があるのではないかと考えています。先生が定期的に話をし、学生がそれに集団で参加するということに対する意義についてはどうでしょうか。

鈴木 講義ももちろんいいのですが、講義をずっとやって基礎から積み上げないと応用にいけないというのは、非常に昔の考え方です。今は知識量が爆発していますから、そんなことをしていたら、いつまでたっても応用にはたどり着きません。ですから、まず応用問題から始めて、必要な基礎知識に下りていくというのが、より意欲がわくやり方だと思います。講義を集まって聞くということにももちろん意味がありますが、例えば一人で本を読んで基礎知識を理解し、講義の時間は人の話を聞くのではなくて、みんなで何かプロジェクトをやるということの意味があるわけです。要は、どちらにどのぐらいの時間を費やすかというのはプログラムデザインの問題で、それぞれに意味はあるけれども、どれをどのぐらいやるか、どれをどの順番で、どのタイミングで入れていくかが、いわゆるカリキュラム方針です。

私が重ねて主張したいのは、基礎ができていないと応用ができないというのは順番が逆で、応用するために必要な基礎をその場で学ぶジャスト・イン・タイム・トレーニングというのが企業では割と当たり前なのですが、それが大学という世界でどの程度できるかということにぜひチャレンジしてもらいたいと思います。

最後にひとこと

山下 先ほどのeポートフォリオ、あるいは卒研に近いという話なのですが、本学で言うと、基礎ゼミナールが一つの応用課題の授業です。それから、来年以降の入学者に関しては、総合ゼミナールという授業をやりませう。これは3年以降の学生がいろいろなところから集まってゼミを持って、今まで習ったことを基に、専門が違う学生が集まって作業をするというゼミです。

では、普通の大人数の授業ではこれができないかという、そうではないと思うのです。われわれ教員は、今まで、できるだけたくさん知識を入れたいと思っていて、そう思うとディスカッションやフィードバックをしている時間はなくて、ある時間全部を知識の伝達に使おうとしてきたと思います。しかし、そろそろその考え方を変えないといけないのではないかな。もちろん、知識を伝えないでディスカッションだけしていたのでは駄目なのですが、その割合を少し考えていって、社会にも分かってもらうというか、大学の教育がためになっているのだということを実感してもらうような経験を積み重ねていかないと、これからわれわれとしては苦しくなっていくのではないかな。今、その曲がり角かなと感じています。今後ともFD委員会や大学教育センターを中心にそういったことを考えながら、皆さんに情報提供したり、教えていただいたりしたいと考えていますので、よろしくお願ひします。

大森 今日のテーマが学習成果あるいはDP・CPということなので、それに絡めてお話ししますと、情報提供、情報吸収の部分は、授業に来る前に、教科書なり、理解可能なレベルのものを先生が提供するなりして吸収して来させて、授業の場では、応用・発展につながるようなアクティブな学びをさせる。アクティブな学びというのは遊ばせるという意味ではなくて、基礎の上に立って考えさせたり、表現させたり、教員もそれに対して適切にコメントしたりというようなことにトライしてみる、それぞれの分野の特性に応じてやってみるということが必要ではないかな。自分の授業科目で学生にどんな力や知識を身につけてほしいかということ突き詰めれば、そういうことになっていくと私は思ひます。

さらに理想型を言えば、個々の授業が目指す学習目標・学習成果と、コースや学科の学位プログラムとしてのディプロマ・ポリシーをうまくリンクしていく。

これは教員サイド、組織サイドの話ですが、より大事なのは学生にそういうことを意識させることです。皆さんにこんな力がつくと思ひて、こんなことをやっているのだということ、自動的には分かっていないという前提でやっていく。その授業科目の始まりの段階から、繰り返しそのメッセージを発していくことが大事ではないかと思ひます。

鈴木 今日お話ししたことで、インストラクショナルデザイン（教育設計）というものがまず学問分野としてあるのだということを知覚していただいて、冒頭に申し上げたように、もう少しこれについて勉強してみたいという気持ちをぜひ持っていただければ、私としてはうれしいなと思ひます。

学生に、高校と同じかと思われたら多分負けです。大学に入学した人間が、「すごいな、大学というところは。面白いな」「これをやっていくと自分に実力がつきそうだな」という思ひを、いきなり入学のときから持てるように、「これは高校と違うな」と思わせるような演出をすることが鍵になるのではないかなと思ひます。

「汎用的スキルを身につけさせませう」とディプロマ・ポリシーに書いてしまったのですが、汎用的スキルというのは、さまざまな違う課題を与えても、同じことを繰り返し身につけさせるような練習をして、失敗させて、「なるほど、そういうものだ」ということによりやく気が付くというものです。これは、卒業研究だけをしていたのでは絶対に身につかせませんし、教養ゼミだけでも駄目です。汎用的スキルを身につけるといふものが繰り返しスパイラルのように出てくるように全体を設計し直さないと、絵に描いた餅になります。絵に描いた餅をいつまでも抱えておくと、それは信頼問題になります。そういう大学が多いのであえて申し上げますが、作文しただけでは駄目なのです。ですから、それを実現するように全体の設計をもう一回見直すということ、ぜひ早い時期にスタートしておやりになることです。多分、それがサバイバルの道だと思ひますので、頑張ってください。